

第3回 リコーダー指導法研修会 報告

東京リコーダー教育研究会

2024 年 12 月 1 日(日) 14 時~株式会社全音楽譜出版社の会議室にて「リコーダー指導法研修会」を開催しました。講師には吉澤実先生(リコーダー奏者 音楽教育家)をお迎えし、14 名の集合参加の講習会と 11 名のアーカイブ参加がありました。

前半は、講義「リコーダー教育が学校に取り入れられた経緯や歴史」でたくさんの資料を見ながらお話しいただきました。



・GIGAスクール構想「GIGA」は「Global and Innovation Gateway for All (全ての児童・生徒のための世界につながる革新的な扉)」を意味し、文部科学省では、2023 年度までに、小学 1 年生から中学 3 年生までの児童生徒に向け、1 人 1 台の学習用端末を導入し、端末を全員が端末を同時接続しても不具合が起きないように高速大容量の通信ネットワークを整備することとしました。

・約 700 年前に使われていたタルトゥリコーダーというものが、2005 年に発見されたことから、リコーダーが大変古い歴史のある楽器といえます。

・「フォンガーラ」(1535 年 著者:シルヴェストロ・ガナッシ)よりソクラテスが 80 歳の時、自然が音楽にどれほど多くの力を与えているかを説き、アリストテレスが音楽を純粋な芸術と唱え、プラトンは色々な面から音楽を賛美しています。アリストクセノスは音楽を魂と呼んでいて、声に学び、画家が自然を模倣するように!演奏します。合唱「声」は何といっても一番、全ての発祥であり、色々な国の楽器を見ると、その国の楽器の音色はその国の声、発音に似ています。

・「音楽大全」(1614-20 年 全 3 巻 著者:ミヒャエル・プレトリウス)に大合奏をやっていたことが書かれています。

・リコーダーが音楽作品に初めて登場するのがシェイクスピア(1564-1616)「ハムレット」(1601 頃)で、日本では関ヶ原の戦いのころ。「この笛は嘘のように簡単に音が出るが...小さなオルガンのように素晴らしい音楽が奏でられる...」劇中のこの台詞がリコーダーの特徴を物語っています。

・ルネサンスリコーダーはピッチが466Hzで半音高く、モダンリコーダーは442Hz。

・「笛の楽園」(1422 年)より著者のヤコブ・ファン・エイクは全盲で、貴族・カリヨン奏者でもあった素晴らしい作曲家です。

・リコーダーが現在よく知られているバロックタイプの形に変化したのは、およそ 17 世紀中ごろ以降と考えられます。「音楽概論」(1677 年 著者:バルトロメオ・ビスマントヴァ)に、ルネサンスタイプと異なるバロックタイプのリコーダーが現れ、この 30 年後、J.M.オトテール(1674-1763 年)の「フルート、リコーダー及びオーボエの基本」(1707 年)に、オトテール自身が製作したバロックタイプのリコーダーが登場します。これには、シトとラ#の指使いが分けて書いてあり、ラ#の方が若干低く使い分けていたといっています。

《リコーダーの持つ教育的特性》

1. 発音が容易な為、早期に完成度のある音楽を表現できる。(ハムレット)
2. 歌唱法と共通している為、音楽表現語法を学びやすい。(ガナツシ)
3. 吹奏楽器の基礎的双方を短期間で学ぶことができる。(文部科学省、学習指導要領)
4. 大きさの異なる楽器の運指が共通している為、早期に多声のアンサンブルができる。多種多様なアンサンブルの展開が容易にできる。(バロック式)
5. 中世から長い歴史を持つ為、豊富なレパートリーを持ち、幼少期から高齢者まで幅広い年代の知的好奇心や美的欲求に応えられる。(それぞれの時代の時代背景、文学、絵画、舞踊などを知ることができる) 色々なドアを開けてくれる。
6. 演奏家だけでなく愛好家のための楽器として長い歴史を持ち、自然な呼吸の応用で発音することから、生涯学習楽器として歴史的及び演奏法的性格を持つ。
7. 古楽や現代音楽の芸術音楽の演奏楽器の他、教育教材としてのエレメント(要素)を持っている。

参加者からの事前質問についても、お答えいただきました。【参加者からの事前質問と吉澤先生の回答】

Q.指使いの定着のさせ方、それに伴う授業での時間数の中での扱い方、指をどうしても見ながら吹いてしまう子への対応、スラーでの吹き方の指導法。

A. 番号をつける(左手親指から 01234567)・運指は覚えるしかない・頭部管をとって力を抜いて軽くさわる、運指だけで舌は使わないで分けて練習する。

Q.運指をどのように教えると覚えるのに効果的でしょうか。低い音の指がしっかり押さえられていなかったり、息が強すぎたりしてきれいに出来ない場合にどのようにしたらよいでしょうか？

A.息は自分の心・優しい気持ち・低い音は、温かい息で吹く。

後半は「レパートリーの紹介」ソプラノ・アルト・テナー・バスリコーダーに分かれて演奏を行い、いろいろな楽曲に触れることができました。和声練習「リコーダーアンサンブルの基礎と技法」(吉澤実著)では、ハーモニーの響きを感じ取りながら演奏し、基本的な和声が豆腐だとしたら、非和声音の「経過音」「補助音」「転過音」「先取音」は、豆腐に醤油やショウガのような味をつけるイメージ。《Four Seasons》Divertimento No.3 for Recorder Quartet(西部哲也作曲)では太陽系の話などをしていただき、春・夏・秋・冬のすてきな楽曲を演奏しました。他にも「パッチワーク」(チャリンジャー作曲)、〜リコーダー四重奏のために〜「七夕伝説」(岩村雄太作曲 2019年吉澤実 委嘱作品)、クリスマスメドレーなどを演奏しました。

そして何より吉澤先生のわかりやすく、かつユーモア溢れるご指導に皆さんから笑顔がこぼれていました。本当に充実した、あっという間の2時間半でした。

講師の吉澤先生に改めて感謝すると共に、この研修会を開催するにあたり研修会場や楽器の貸し出しなど、たくさんのサポートをしていただきました株式会社全音楽譜出版社の皆様にご礼申し上げます。ありがとうございました。

【参加した方の感想】

- ・吉澤先生のこれまでの様々なお話を聞かせていただき楽しかったです。
- ・少人数でアットホームな環境で受講できたのでよかった。吉澤先生のお話もとてもなかなか聞けない内容でも勉強になりました。
- ・お話は楽しく、実技講習も有意義でした。
- ・憧れの吉澤先生のお話を伺えて感無量でした。

(TRS リコーダー活用担当 長谷川)

